プライミング課題を用いた高齢者の世代性に関する実験的検討

橋本　裕美

本研究では，高齢者における“次世代への関心”としての世代性が“未来の世代に関する情報”の処理に与える影響を検討するため，先行刺激として世代性を喚起する画像を，ターゲット刺激として世代性に関連する語を用いたプライム実験を行った。実験参加者は高齢者および大学生であり，仮説は「一般に世代性が高いとされる高齢者においてのみ，世代性プライムの効果がみられる」とした。

まず，予備調査 1 において，高齢者を対象に質問紙調査を行い，「未来の世代のことを考えた際に思い浮かぶ言葉」の自由記述から，世代性に関連する語を抽出した。また，抽出した世代性関連語をもとに，表記，音韻，モーラ数を統制した無関連語および非語を作成した。

その後，予備調査 2 において，未来の世代を象徴する子どもや継承されゆく日本文化のイメージ，また負の遺産として次代を脅かす社会問題等のイメージを表現した画像を世代性画像として選定した。同様に，世代性概念との結びつきの弱いニュートラル画像を選定した。

本実験は，既存尺度によって世代性を測定するとともにプライム課題を実施し，世代性の高さによってプライム効果に影響がみられるかどうかを検討するというものであった。実験参加者は，呈示される単語が有意味語であるか非語であるかの弁別をできるだけ速く行い，反応キーを押すことを求められた。実験には，呈示される刺激の組み合わせについて，プライム画像（2 水準 ： 世代性画像，ニュートラル画像）×ターゲット語（3 水準 ： 世代性関連語，無関連語，非語）の 6 パターンの条件があった。

分析では，高齢者群の方が大学生群よりも世代性得点が高いことが確認されたため，各実験条件における平均反応速度について 2 群を比較したところ，ともにプライム効果はみられなかった。これは，生涯発達心理学の枠組みにおける発達課題としての世代性の特徴を示す結果であると解釈された。

そこで，高齢者における世代性の個人差に注目し，世代性高群と低群を比較したところ，世代性高群においてのみプライム効果がみられた。このプライム効果は，世代性関連語への反応促進効果に併せて無関連語への反応遅延効果を伴っており，このことから，世代性の高い高齢者において特有の世代性スキーマが発達しており，世代性画像の処理に多くの心的資源が費やされることが示唆された。

本研究の問題点としては，新密度や心象性といったターゲット語の属性の統制および語彙判断課題における有意味語と非語の数の不一致が挙げられ，今後検討すべき課題である。今後の展望としては，実験デザインや刺激の洗練によって，世代性を認知の観点から検討する実験としての信頼性および妥当性を高めること，情報処理の観点から世代性の概念に関する新たな知見を蓄積していくことが挙げられる。（臨床死生学・老年行動学）